



特集

世界の映画から考える ジェンダー・セクシュアリティ

- ・ 駐日ノルウェー大使館からのおすすめ作品
- ・ 駐日アイスランド大使館からのおすすめ作品
- ・ 在日オーストラリア大使館からのおすすめ作品

田嶋陽子さん講演会記録
「わが・ママを生きる」

VOL.
76

令和5年(2023年)
2月発行



特集 世界の映画から考えるジェンダー・セクシュアリティ

港区に所在する3つの大使館からジェンダー・セクシュアリティについて考察が深められる自国に所縁のある映画をご推薦いただきました。映画という身近なエンターテインメントから諸外国の文化やジェンダー平等、LGBTQをめぐる状況について考えてみませんか。

駐日ノルウェー大使館からのおすすめ作品



『Hei Verden/Hello World』 監督：ケネス・エルヴェバック

2021年／ノルウェー／88分／原題：Hei Verden（2022年10月にリーブラホールにて日本初上映・劇場未公開作品）

前作『バレエボーイズ』（2014年）が日本でも好評だったケネス・エルヴェバック監督の新作で、ノルウェーの高校生ルーナ、ヴィクトール、ティナ、ヨアキムの3年間を追ったドキュメンタリー作品です。4人のストーリーを通して、クィアであることをオープンにしたノルウェーのティーンエイジャー達が成長の過程で経験する苦悩や葛藤、彼らの視点を通じた気づきを知ることができます。自分自身に正直であることに向き合おうとする姿が明るく魅力的に描かれた作品です。

見どころ



4人の視点を通して、現在のノルウェーでクィアとして成長する過程を垣間見ることができます。



『テルマ』 監督・脚本：ヨアキム・トリアー

2017年／ノルウェー・フランス・デンマーク・スウェーデン合作／116分／PG12／原題：Thelma／配給：ギャガ

北欧を代表する“鬼才”とも呼ばれる映画監督ヨアキム・トリアーによるホラーのカテゴリーを卓越したヒューマン・ストーリーです。ノルウェーの片田舎の町で、信心深く厳格な両親に育てられた主人公テルマは、なぜか幼いころの記憶が抜け落ちていました。やがてオスロの大学に入学した彼女は、同級生の女性アニヤに生まれて初めて恋をします。主人公が自分は何者なのかを受け入れ、自分らしくいることの恐怖に向き合う姿が描かれています。

見どころ



ノルウェーの寓話や自然、魔女についての伝承などから着想を得た美しい映像展開が印象的です。

©2017 MOTLYS AS, FILM I VÅST AB, SNOWGLOBE APS, LE PACTE SAS, FILMPOOL NORD AB, B-REEL FILMS AB, DON'T LOOK NOW AB. All Rights Reserved.
DVD発売中（価格：¥1,257（税込）、発売元：ギャガ）



『Maiko ふたたびの白鳥』 監督：オセ・スペンハイム・ドリブネス

2015年／ノルウェー／70分／原題：Maiko: Dancing Child／配給：ハビネットファントム・スタジオ

ノルウェー国立バレエ団で初めて東洋人のプリンシパルに抜擢された西野麻衣子の挑戦を追ったドキュメンタリー作品です。30代を迎え、キャリアと母親になるという選択の間で心揺れていた矢先、オペラハウスで音響・照明監督を務めるノルウェー人の夫との間に子どもを授かります。出産・育休を経てプリンシパルへの復帰を決意し、クラシックバレエの中でも特に難役とされる「白鳥の湖」に挑んだ彼女の強くなやかな踊りには心動かされます。

見どころ



ライフもキャリアも諦めずに未来を切り拓き、自分なりの生き方をつかみ取っていく姿に勇気づけられます。

Maiko ふたたびの白鳥、発売日：2016/9/2
DVD発売中（価格：4,290円（税込）、販売元：ハビネット・メディアマーケティング）



ノルウェーのジェンダー・セクシュアリティに関する豆知識

クィア・カルチャーイヤーとその歴史

ノルウェーでは1972年4月21日に男性間の性行為を禁止する刑法が廃止され、同年5月17日のノルウェーの憲法記念日に、同性愛者の権利を訴える最初のデモが起こります。このデモを皮切りに、同性愛について話すことがタブー視されていた社会に少しずつ変革が生まれていきます。1981年にはLGBTQに対するヘイトスピーチが法律で禁止され、その翌年1982年には社会省は診断リストから同性愛を削除します。1993年には同性の2人にパートナーシップを登録する権利を与えるパートナーシップ法を世界で2番目に施行し、2009年には性別

による区別の無い婚姻法が施行されました。この新たな婚姻法では、同性婚が認められただけでなく、レズビアンのカップルが人工授精により子どもを持つ権利が認められた他、同性カップルが養子縁組をすることも可能となるなどの前進がありました。2016年からは、法律上の性別変更の申請に際して医療機関の受診や手術が不要になるなど変化も起こっています。

男性同性愛が非犯罪化されてから50年が経った昨年2022年は、ノルウェーの「クィア・カルチャーイヤー」でした。国立の図書館や美術館で、展示やトークショー、映画上映など多岐にわたるプログラムが実施された他、全国の公共図書館でクィア・ポスター展が企画されるなど、年間を通じてLGBTQの人権に関するイベントが各地で開催されました。



性の多様性に関する組織

ノルウェーで最も歴史が古く、かつ最大規模のNGO組織は、「FRI (フリイ)」というジェンダーと性の多様性のための協会が挙げられます。1950年代からLGBTQの権利を明確に主張し、社会へ提議し続けており、国の助成を受けて各地でプライドイベントを主催するほか、行政、学校、企業等への助言を行なっています。ノルウェー国内だけでなく、アフリカ、アジア等の姉妹組織と連携し、LGBTQの人権擁護の活動を国際的に展開しています。その他にも、2011年に政府の行動計画区に基づき設立された国立LGBT知識センターや30歳以下のLGBTQを対象としたNGO「Skeive Ungdom (シャイヴェ・ウングダム)」なども存在します。

安心して出産・子育てができる支援制度

1977年に父親も取得可能な育休制度が始まった当初の利用率は低迷していましたが、1993年に父親のみが取れるパパ・クオータ（父親割当制度）が導入されたことにより、4%程度であった男性の育休取得率が現在は70%(2019年統計)まで上昇しました。パパ・クオータの期間はその時の政府の方針によって変更があり、制度導入当初4週間であった期間が現在は15週にまで増えています。ノルウェーの育休制度では、ママ・クオータ、パパ・クオータを除く16週は父親と母親のどちらが取得してもよいことになっており、給与額100%補填の場合には計49週、80%補填の場合は計59週が与えられます。育休の取得は法的義務ではありませんが、パパ・クオータもママ・クオータも、出産から3年以内にとることが出来ます。両親共に働いており、一定期間以上の就労期間があるなどの諸条件を満たしている場合には子どものいる同性カップルの場合にも、二人の親にほぼ同様の育休機会が与えられます。養子の場合には、3歳未満の子どもの世話を開始する日から育休を取得することができます。

未就学児の保育費は家庭で負担しますが、小学校から大学までの教育費は公立の場合には無料になります。1歳の1年間は保育園に行かずに家庭で面倒を見る場合には月に約10万円が補助される制度や12歳以下の子どもを持つ労働者は年間10日間まで有給扱いで給与が100%支払われる「子ども疾病休暇」など、国による子育て支援が手厚く、家庭の状況にあわせてさまざまな選択ができます。

お話をうかがった方

駐日ノルウェー大使館
広報担当官

しばた えりこ
柴田 恵理子さん



駐日アイスランド大使館からのおすすめ作品

『たちあがる女』 監督・脚本：ベネディクト・エルリングソン

2018年/アイスランド/フランス/ウクライナ合作/アイスランド語/101分/英語: Woman at war/後援: 駐日アイスランド大使館/配給: トランスフォーマー

2019年アカデミー賞アイスランド代表作品。音楽と自然を愛する主人公のハットラは、コーラス講師の他に環境活動家というもうひとつの顔を持ち、アイスランドの自然を脅かす地元のアルミニウム工場に対して、密かに闘いを繰り広げていました。そんなある日、彼女の元に長年の願いであった養子を迎える申請がついに受け入れられた知らせが届きます。母親になるという夢の実現のため、ハットラはアルミニウム工場との決着をつけるべく、最終決戦の準備に取り掛かります。



見どころ



母親になるという夢も自身の活動も諦めない、強く自分らしく生きるひとりの女性の姿に力づけられます。

©2018 Slot Machine-Gulldrengurinn-Solar Media Entertainment-Ukrainian State Film Agency-Köggull Filmworks-Vintage Pictures
DVD発売中(発売: トランスフォーマー)

『主婦の学校』 監督：ステファニア・トルス

2020年/アイスランド/アイスランド語/78分/原題: Húsmæðraskólinn/英題: The School of Housewives/後援: 駐日アイスランド大使館/提供・配給: kinologue

1942年から現在まで続く、首都レイキャビクの中心部にある男女共学の家政学校「主婦の学校」を舞台にしたドキュメンタリーです。学校で学ぶことは、調理や裁縫、洗濯、アイロンがけなど家事の基本だけでなく、破れた衣服の修理や食品を使い切ることなど、現代社会で重要となる環境に優しいサステナブルな学びも含まれます。単に家政能力を高めることを目的とはせず、自立した人間の営みを学ぶ学校という存在は、どの時代・場所でも必要であることがよくわかる作品です。

見どころ



家事は女性だけの仕事ではない、男性にとっても人間の営みを学べないことは不利益であると痛感します。



©Mús & Kött 2020

『ハートストーン』 監督：グズムンドゥル・アルナル・グズムンドソン

2016年／アイスランド・デンマーク／アイスランド語／129分／原題:Hjartasteinn／英題:Heartstone／後援:アイスランド大使館／配給:宣伝:マジックアワー

思春期の少年少女たちの繊細な心の揺れ動きが丁寧に描かれたアイスランドの青春映画の傑作です。小さな漁村で暮らす幼なじみのソールとクリスティアンは何をするのも一緒の大親友です。思春期にさしかかり、ソールには気になる異性が出てくる。ソールの気持ちを知ったクリスティアンはふたりの仲がうまくいくよう後押ししますが、内に秘めたソールへの特別な感情に気づき当惑します。閉鎖的な漁村でソールとクリスティアンに好奇の目が向けられる出来事が起き…。



©SF Studios Production & Join Motion Pictures
Photo Roxana Reiss

見どころ



アイスランドの美しく雄大な自然と少年少女たちの心の機微が記憶に残ります。



アイスランドのジェンダー・セクシュアリティに関する豆知識

政治分野でも女性が活躍

従来のアイスランドでは漁業が基幹産業で、夫婦共に漁業に従事（男性は漁を、女性が漁でとれた魚を加工）して同じ会社に所属している家庭もありましたが、女性は男性の6割程度しか給料をもらっていないような賃金格差や家事育児が女性のみの役割とされていた不平等な状況が続いていました。そうした不満が1975年のストライキにつながったとも言われています。9割以上のアイスランドの女性が家庭や就業場所から離れて女性の人権について声をあげたストライキによって、女性がいなければ社会生活が営めないことが可視化され、この頃から女性の就業継続と一体でもある児童福祉の分野についても国会でもよく議論されはじめました。

1980年には世界で初めて民主的に選出された女性大統領ヴィグディス・フィンボガドゥティルが誕生し、1982年には自治体で、1983年には国会で、女性だけの政党が誕生しました。女性の投票先が女性のみの政党に流れることを危惧した他政党の男性議員たちが自身の政党に女性議員を増やす努力をはじめます。アイスランドは女性議員の比率を法律で定めるクォータ制は採用していませんが、政党によっては選挙の際に女性候補の最少人数を定めており、現在は国会議員の5割近くが女性です。



ナショナルティアオーガニゼーションSamtökin78(サムトーキン)

1978年に設立されたアイスランドのLGBTQのための権利団体。首都レイキャビクのダウンタウンで常設のコミュニティセンターを運営している。センターでは、当事者やその家族などのためのさまざまなイベントに参加することや、専門的なカウンセリングを受けること、図書資料の閲覧などのサービスを無料で利用することができ、あらゆるセクシュアリティの人が安心して自分らしく過ごせる居場所となっている。



多様なセクシュアリティの人権擁護の歴史

2023年5月に開催されるIDAHOT+フォーラムのホスト国にも承認され、男女平等かつLGBTQにとっても生きやすい印象があるアイスランドですが、必ずしも昔から多様なセクシュアリティに対する理解が促進されていたわけではありません。

1940年に同性愛行為が合法化された後にも、初めてゲイであることを公的にカミングアウトした男性歌手のホルドゥール・トルファソン氏や初めてトランスジェンダーであることを公的にカミングアウトした女性アンナ・クリスチャンスドッティル氏は国外移住を余儀なくされた時代もありました。1996年には、ヨーロッパで初めて同性間のパートナーシップを認め、2006年には同性カップルに養子縁組と体外受精の権利を付与しました。同性婚を合法化した2010年には、世界で初めて首相が同性のパートナーと結婚し、2015年にはアイスランド教会も同性パートナーの結婚を歓迎すると宣言しています。近年はトランスジェンダーの人権を擁護する法律の整備も進んでおり、2012年には名前変更プロセスを正式に定める法律が制定され、2019年には性別変更の要件から手術が撤廃されるなどの動きがありました。



アイスランドでは男女平等という土台のもと、「女性だから・男性だから」という性別による決めつけや固定的なジェンダー観が薄れていったことが、LGBTQにとっても生きやすい環境づくりに繋がっているのではないかと考えられます。また、アイスランド一国だけでなく他の北欧諸国と足並みを揃えて進めようという意識があることも理解促進の後押しになっているのではないのでしょうか。

お話をうかがった方

駐日アイスランド大使館
商務・広報

ほ さか りょう すけ
保坂 亮介さん



在日オーストラリア大使館からのおすすめ作品



『ソウルガールズ』 監督：ウェイン・ブレア

2012年／オーストラリア／英語／PG12／98分／原題：The Sapphires／配給：ポニーキャニオン

1960年代のオーストラリアで先住民の居住地区に暮らす三姉妹は、次々と歌唱コンテストに出場しますが、人種差別を受け実力に反する落選が続いていました。ソウルミュージックを愛するマネージャーと出会い、「盗まれた世代」のひとりとして家族から引き離されていた従姉妹も加わり4人でソウル・グループを結成します。ベトナム戦争の慰問のバンドとして戦場に赴き、さまざまな困難に見舞われながらも、夢を諦めない彼女たちの姿に勇気もらえる実話を基にした作品です。

見どころ



作品全体は明るくエネルギッシュでありつつ、当時の時代背景や人種差別等についても考えさせられます。

©2012 The Sapphires Film Holdings Pty Ltd, Screen Australia, Goal Post Pictures Australia, A.P. Facilities Pty Ltd and Screen NSW
(Blu-ray: ¥2,750 (税込)、DVD: ¥1,980 (税込)、発売・販売元: ポニーキャニオン)



Netflix作品『ハンナ・ギャズビーのナネット』
独占配信中

『ハンナ・ギャズビーのナネット』 監督：マデリーン・パリー・ジョン・オルブ

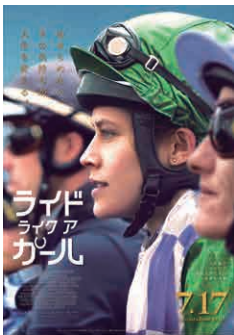
2018年／オーストラリア／英語／69分／原題：Hannah Gadsby: Nanette／提供：Netflix

レズビアンであり、ADHDと自閉症でもあるオーストラリアのコメディアン、ハンナ・ギャズビーによるスタンドアップコメディです。アメリカやヨーロッパでも人気を博し、ニューヨークタイムズ紙においても「ここ数年で最も話題になった作品」と評されています。「自分を卑下するユーモアはこれ以上やらない」とステージで宣言したハンナのネタには、自身のジェンダーや性的指向などを理由に受けた暴力や葛藤、男女不平等な社会への怒りが散りばめられています。

見どころ



コメディアンは男性の方が面白いという英語圏の通説を覆した作品です。



©2019 100 to 1 Films Pty Ltd

『ライド・ライク・ア・ガール』 監督：レイチェル・グリフィス

2019年／オーストラリア／英語／98分／原題：RIDE LIKE A GIRL／配給：イオンエンターテイメント

オーストラリアで最も有名な競馬のレースであるメルボルンカップで、女性騎手として初めて優勝したミシェル・ペインの半生が描かれています。調教師の父をはじめ兄たちの殆どが騎手という家庭環境のなか、ミシェルも思春期になる頃には騎手を夢見るようになります。落馬し騎手生命を左右する大怪我に見舞われながらも、不屈の精神で努力を重ね“聖杯”に挑みます。

見どころ



「女が勝つ時代はまだ来ない」と言われた男性ばかりの競馬界で、女性参政権の獲得を目指したイギリスの女性社会政治同盟のシンボルカラーである三色を身に付けてレースに挑むミシェルの姿に力づけられます。



オーストラリアのジェンダー・セクシュアリティに関する豆知識

民意を反映した同性婚法制化や最近のプライドイベント

オーストラリアの婚姻制度は日本と異なり、異性・同性を問わずパートナーとして同居を2年間続けている場合などに、婚姻関係と同様の法的権利が認められることがあります。国内全土で郵便による意識調査を実施し、国民の意見を問うユニークなプロセスを経て2017年12月に同性婚を認める法律が施行されています。本調査は任意参加でありながら有権者の約8割が参加し、参加者のうち約6割が同性婚に賛成の意見を示したことが、法制化の大きな後押しとなったと言われています。

オーストラリア国外からも注目される大きなプライドイベントとしては、毎年2月中旬から3月上旬にかけて開催される「シドニー・ゲイ・アンド・レズビアン・マルティグラ」が挙げられます。1978年にLGBTQへの差別に対するデモとしては始まり、現在ではLGBTQ当事者だけでなくヨーロッパやアジアからも多くの参加者がいます。メインのパレードの他、映画祭や人権に関する講演会、パネルディスカッションなどさまざまな企画が催されます。近年はオーストラリアの大都市だけでなく、地方でも展示会やトークショーなどをイベントの一環として開催する流れが生まれており、自分が生まれ育った場所で自分らしく生きられる社会に少しずつ近づいていることを嬉しく思っています。2023年のワールドプライドはオーストラリアで初めて開催されるため、ぜひ多くの日本の方にも訪れてほしいです。



LGBTQ当事者の主人公が登場する連続ドラマも注目

2013年にNetflixでシーズン1が公開された「ブリーズ・ライク・ミー」は、現代のオーストラリアで暮らす20代のゲイの主人公の日常が美化されず、リアリティをもって描写されています。大切な人と一緒に見ながら、メンタルヘルスやジェンダー・セクシュアリティについて話し合うきっかけになる作品です。「ファースト・デイ わたしはハナ!」は、トランスジェンダーの女の子ハナの学校生活を描いた青春ドラマであり、自身もトランスジェンダーであることを公表しているイーヴィ・マクドナルが主演を務めています。日本ではNHK Eテレで放送され、2020年日本賞児童向け部門優秀作品にも選ばれました。

政治・外交で女性がリーダーシップを発揮

2015年時点では、外務貿易省で幹部の仕事を行う人物のうち女性の割合は25%程度、オーストラリアを代表して他国に派遣される大使のうち女性の割合は23%程度でした。80年代から外務貿易省に入職する新卒の職員のうち50%が女性であったにも関わらず女性の比率が低い背景を調べたところ、出産によって1度職場を離れた場合に、復職後に昇進の機会を与えられていないことが原因であることが分かりました。外務貿易省は改善に努め、現在は大使の女性比率は42%程度にまで上昇しました。在日オーストラリア大使館で2022年6月まで大使を務めていたジャン・アダムズ氏は、初の女性駐日大使でした。2022年7月に外務貿易省事務次官に任命され、本省で活躍しています。また、2022年5月の総選挙では、上院は58%、下院は38%の議席を女性が占めるほど政治分野にも女性が参画しています。

このように分かりやすい数字として表れる変化だけでなく、ジェンダーの観点を重視する意識も浸透してきています。例えば、パネルディスカッションへの登壇依頼があった際に、登壇者のジェンダーに偏りがある場合には参加しない決断をとることもありますし、SNSに写真を投稿する際に男性だけが並んでいる写真を投稿しないようにするといった意識はもはや当たり前のこととしてオーストラリアの政府や企業に浸透しつつあります。大使館内にもダイバーシティ委員会のようなものがあり、あらゆるシーンでジェンダーの観点を念頭に置き方針を検討しています。

お話をうかがった方



在日オーストラリア大使館

写真右から

参事官(広報・文化担当)

トム・ウィルソンさん

エグゼクティブ・アシスタント

ジャレ・ホフマンさん

広報文化部・豪日交流基金事務局 ディレクター

徳 仁美さん

田嶋陽子さん講演会記録

2022年9月25日(日)、講師に田嶋陽子さんをお招きし、「わが・ママを生きる」と題してご講演いただきました。「どうして私はこんなに生きづらいんだろう」という、自身の問いや経験から、この社会に根深く存在する女性差別の構造を明らかにしてきた田嶋さん。近年、若い世代からも高い関心が寄せられています。講演の要旨をご紹介します。



わが・ママを生きる

ここに来るまでの間に、幼い子を抱えて歩いている男性の姿を見かけました。「世の中変わったな」と思います。しかし、数字だけを見ると育児休業を取得する男性の割合はまだ少ないですね。また、女性が管理職についたがらない理由は、日本人男性の家事時間が他国に比べて極端に少ない状況の裏返しとも言えます。

国会を見ても、選択的夫婦別姓もなかなか通らない。要職についた女性議員の中にも、レイプなどの性暴力について「女性はいくらでもウソをつける」と、この時代でも女性の人権など理解できない人たちがいます。しかもそういう人たちを選挙で選ぶ人たちもいます。男社会に過剰適応した男女が国会を牛耳っているかぎり、国会は明治時代の尾っぽを引きずったままの非民主的な家父長制社会そのものに見えます。ただ、女性議員の数が全体の30%になると、国会は変わるといわれています。現在は15%内外のはず。

性別役割分業こそ女性搾取の原点

「女は最後の植民地」——フランスの作家ブノワット・グルーが言いました。このところエリザベス女王の死で、植民地や君主制という言葉をよく耳にしますが、ヨーロッパの先進国と呼ばれる国々は植民地から資源を吸い上げ、富を築いたわけです。「女は最後の植民地」なら、男社会は女性から何かを吸い上げているということです。個々の男性にはそういう意識はない。むしろこの世の中には男役割と女役割があって、搾取どころか、養ってやっているのに何の文句があるのかと思っている人もいます。でも、その役割分業こそが、女性搾取の原点なのです。

「女は第二の性」と言った人もいました。シモーヌ・ド・ボーヴォワールですね。なぜ女性は二番手になったのか。若い頃はその差別構造に気が付かない女性も多いと思います。しかし、医学部入試問題で明るみに出たように、大学進学や就職または結婚したとたんに、「あれ、何かおかしいな」と気づく。なぜ、社会システムは女性を

排除したのかと言えば、女は子どもを産むからです。

最近の例でいうと、高度経済成長期に女性を雇うことは会社にとっては面倒くさいことだったわけです。女性は生理休暇を取るし、妊娠・出産に伴う休暇も取り、更年期は体調不良になるetc....。男性だけで仕事をしたほうが楽だし効率が上がる。そこで女性を専業主婦にして家に閉じ込め、働く夫と子どもの面倒を見させて、その分男たちは残業ざんまいの働き方をしてきた。

専業主婦制度は、日本が高度経済成長するためにつくられた、男社会に有利なしくみですよ。日本は「夫婦別産制」だから稼いだ給与は全部男のもの。女の人の家事労働の価値は月におおよそ23~25万くらいになるとされ、介護も含めると40~50万の価値があると言われていますが、専業主婦はそれを払ってもらえない。ですから老後は年金も少なくて貧しいですね。この家事労働を市場に出せば約100兆円^{※1}。OECDに言わせれば、女性が働いて税金を納めれば日本の年金問題もすぐ解消できるというわけです。今は専業主婦世帯が少なくなって600万世帯を切りました。大卒の女性たちが一生働き続けると、2億6千万円の生涯所得を得ると言われています^{※2}。一方、同じ大卒女性が結婚を機に退社し、40歳を過ぎてパートで働き始めたとなると、生涯所得は6千万円で、その所得格差は約2億円です。老後のためにも仕事は続けてほしい。女の人の老後が笑顔だとすてきですよ。

幼少期の抑圧と津田塾大学への進学

私たちの世代が子どもの頃は、「お嫁に行くことが女の幸せ」と刷り込まれました。そのためには「女らしくしないと」と育てられました。私は「お前みたいに生意気で不細工な女の子は嫁の貰い手がない」と言われ、親や学校の先生にもいじめられました。成績は良くて、将来は外科医になりたいと思っていましたが、中学の先生に「女はメンスが来たら終わりだ」と言われました。要するに、あとは結婚して子どもを産むのが役目ということ、女は「穴」と「袋」でしかないということです。近所

のおばさんにも「陽子ちゃん、いくら勉強できたって女だからね」と。そうやって抑圧されていきました。

それでも私は夢をかなえたくて、進学校に行こうと思っていました。恋心を書いていた日記が親に見つかって、日記帳を一枚一枚破いて火鉢で燃やされました。親と先生が相談し、色気づいた娘は男女共学の進学校にはやれないと、女子高に行かせられました。私はふてくされて授業に出ずに図書館に通い、ヨーロッパ文学などを洗いざらい読みました。高校2年の英語のスピーチコンテストはイプセンの『人形の家』でした。

図書館に籠っているとき出会ったのが、津田塾大学の創設者である津田梅子さんや、社会運動家の大杉栄を刺した神近市子さんや、日本女性で初めて国連代表になった藤田たきさんなどです。私は彼女たちが学んだ津田塾大学に進学しました。そこではオリジナリティを出すことがどんなに大事かを学びました。一般に女性は、男性に愛されてナンボの者と思われているので、その思いが邪魔をして自分の能力を磨くことに集中できないんですね。女子大で思いきり自分を作り上げる訓練をした、それがとてもよかったなと今になって思います。それが女子大のよいところのひとつなのかもしれません。

性別役割分業を温存させる「男らしさ」「女らしさ」

そして女性たちを嫌でも二級市民にしてしまうのが「男らしさ」「女らしさ」の社会規範です。

「男らしさ」は、たくましい、包容力、決断力、リーダーシップ、我慢強い、質実剛健、体力がある、甲斐性がある、正義感が強い、経済力がある、優しさ、職人気質、論理的、気前がいい、責任感、寡黙、空間認識能力etc....。

この「男らしさ」には、努力して自立した人間が将来を見つめて、何かを成し遂げるために自主的に頑張り独立する姿が浮かんできます。

一方、望ましいとされる「女らしさ」には、気配り、従順、気が利く、面倒見がいい、笑顔、素直、おしとやか、謙虚、可愛らしさ、しなやかさ、きめ細かい、優しさ、控えめ、忍耐、きれい、優雅さ、愛嬌、華やかさ、料理上手、か弱さ、母性愛、良妻賢母etc....。

相手を立てたり尽くしたり、相手の意に沿う態度づくりと、だれかに見てもらう容姿に関するものが特徴的です。これらのワードから読み取る「女らしさ」の特徴は、言ってみれば、人あつての自分、人間関係の中でしか生かされない自分。そこには本人が人間としてどうありたいかは、ない。人の面倒を見て、人の言うことを聞いて生きるという、自分なしの人間が出来上がっていく。あとは相手を気持ちよくさせる容姿。

「女らしさ」は結局「男らしさ」を生きる人間の生活を助け、楽しませるものになっているわけです。「私がきれいになりたいのは自分を大事にしているから。別に男のためではない」と言う人もいますが、たとえばあなたがそう思っているとしても、これは構造なので、空気のようにこの影響下を生きざるをえない。それが構造の恐ろしさです。構造は霧雨のようなもので、気づいたら、「女らしさ」を生きていて、人間としての女性は骨抜きにされているということです。

実際、女性は能力を発揮するのを渋っている。自分が持っている正義感や決断力を発揮しそこなっていないか？どこかで遠慮していませんか？発揮したら生意気だとか女らしくないとか、女からも男からも批判されてしまう。「男らしさ」のほうは、それを生きれば一人前の人間になれるけれど、「女らしさ」は自分が何ものかになるための要素ではなくて、何ものかになるうとしている男性を補助するための要素、すなわち道具です。

女性は男性と同じ人間です。「女らしさ」を演じれば演じるほど自分を殺すことになり、女性は卑屈に、意地悪になっていく。悪例としては、嫉妬深い、意地悪、つるみたがる、八方美人、甘えたがる、自信がない、いつも人の意見に左右される、自分がないなど、ひとりの人間として頼りない存在となります。しまいには自分の気持ちさえわからない人になります。人間は自分の持っているものを十二分に出さないと腐っていきます。

一方、「男らしさ」をはき違えて弱者いじめに使ったりする悪例としては、セクハラとかレイプなど。また、威圧的、怒鳴る、自慢ばかり、マンスプレイング、「これだから女は」風の日線、人の話を聞かない、好戦的、暴力的、自己中心的などが挙げられます。

この男女間の力関係の差が男が主人、女は従者の古い性別役割分業の温存につながるということは、これでおわかりいただけると思います。

中世の時代、能の世界で、能の仮面を被っていると、はずそうとしてもはずれなくなってしまったという話を聞いたことがあります。仮面が実態になったということです。今ならもし仮面を外すとすれば、カウンセリング等が必要になってくると思います。私がそうでした。

私は、46歳まで母の抑圧から解放されませんでした。当時はカウンセリングやセラピーなどもなく、10冊の本を書いて自分ととことん向き合うことで自分自身を解放しました。ものすごく時間がかかりました。NHKから「母と娘」をテーマにした番組の取材を申し込まれたことがあります。その時私は「母が謝ってくれなければ出ない」と言いましたが、母は「私が何をしたの？」という認

識でした。力が抜けてしまい、その時わかったんですね。いじめている人はいじめている意識はないんだと。私はとても苦しんだのに、母は私をきびしくしつけてただけ、いいお嫁さんにしたいくて社会の望むような女性に育て上げようとしていただけなのだ。つまり母は世間そのものだったわけで、良妻賢母とはよき妻と母であっても、そこには自分がないということです。それがわかってから私は強くなりました。自分を生きる人生に変えました。

「自分そのもの」を生きて

本来の女性は良い意味での「男らしさ」と呼ばれる要素をみんな持っています。強い正義感も、甲斐性も、体力もある。決断力もある、リーダーシップもある。「女らしさ」を発揮して相手に気をつかうことも、時には大事です。その「女らしさ」のケアの力を今では仕事にしている人たちもいますね。どうであれ、私たちは、これから自分を生きなくてはなりません。自分の人生を生きるためには、押さえ込んできた自分を取り戻し、自分の気持ちを大事にし、自分を解放していく必要があるのです。「女らしさ」から解放されて、男性のみに期待された「男らしさ」、すなわち一人前の人間になるための良い資質

を、自分なりに目一杯生きてみてください。「自分らしさ」を、いえ、「らしさ」はいらない、「自分そのもの」を目一杯生きてみてください。自分が頼もしくなるよこびを味わってみてください。結果、女性を抑圧している性別役割分業は自然消滅していくはずです。

- ※1 「無償労働の貨幣評価」(2018年12月、2019年6月17日修正、内閣府経済社会総合研究所国民経済計算部地域・特定勘定課)
※2 久我尚子「大学卒女性の働き方別生涯所得の推計」(『ニッセイ基礎研究所報vol.61』、2017年、ニッセイ基礎研究所)

講師プロフィール

田嶋 陽子さん

元法政大学教授。元参議院議員。英文学・女性学研究者。書アート作家。女性学の第一人者として、またオピニオンリーダーとしてマスコミでも活躍。津田塾大学大学院博士課程修了。2度のイギリス留学。定年を過ぎてから歌と「書アート」を始める。歌では、東京や大阪のシャンソンライブハウスに出演、年1回東京・日本橋「三越劇場」でのソロコンサート(2023年は5月4日に東京・四谷「蟻ん子」で、11月4日に東京・日本橋「三越劇場」でソロコンサートを予定)。書アートでは、第50回記念新美展で作品『娑婆』が内閣総理大臣賞を受賞、各地のデパートや画廊で個展を開催している(2023年6月30日～7月5日まで表参道『コンセプト21』で第8回個展)。著書は『愛という名の支配』(2022年韓国版・2023年中国版刊行)『ヒロインはなぜ殺されるのか』(2023年KADOKAWAから復刊)『我が人生歌曲』など多数。現在、読売テレビ「そこまで言って委員会NP」に月2回、準レギュラーで出演。

リーブラ館内のご紹介

2022年10月からリーブラの交流コーナー付近の壁に飾られている日本画『待宵(まつよい)』は、みなとパーク芝浦への移転前に港区婦人会館のホールにも飾られていた歴史があります。「港区婦人ニュース 窓をあけよう」の第7号(昭和58年発刊)や第18号(平成元年発刊)からも当時の展示が確認できます。「港区婦人ニュース 窓をあけよう」のバックナンバーはリーブラの図書資料室でご覧いただけます。

『待宵』
昭和39年、作者：月岡 榮貴(つきおか えいき)1916-1997



港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦
Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254
▶<https://www.minatolibra.jp/>



アクセス

- JR「田町駅」東口(芝浦口)徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線「三田駅」A7出口 三田線「三田駅」A9出口 徒歩7分
- ちいばす ◆芝浦南ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」徒歩0分
◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」徒歩4分
- 都営バス(田92・99)「田町駅東口」徒歩6分



港区男女平等参画情報誌「OASIS オアシス」76号 2023年2月発行
発行：港区立男女平等参画センター 指定管理者 株式会社明日葉